

『南山神学』31号（2008年3月）pp. 141-159.

【研究ノート：典礼史研究】

高田三郎と典礼聖歌（2）

西脇 純

はじめに

南山学園は2007年に創立75周年を迎えた。11月には記念ミサ、記念式典、記念フェスティバルなどさまざまな関連行事が開催され、南山学園の教育モットー「人間の尊厳のために」についてあらためて考える機会となった。

このような学園行事や式典に欠かせない聖歌が「平和のための祈り」であろう。「ああ主よ われをして おん身の平和の道具とならしめよ」という言葉で始まるこの聖歌は、アッシジの聖フランシスコの作と一般に伝えられており、人のあり方、生き方を高らかに謳う祈りの歌として、南山学園の各単位校の卒業式や入学式などで歌い継がれ今日に至っている。南山大学において伝承されている訳詞者は山根義雄本学元教授であり、作曲者も同じく本学元教授の山本直忠と伝えられている。

この「平和のための祈り」は、前号の冒頭で紹介した高田三郎帰天5周年記念演奏会「愛・地球博パートナーシップ事業 高田三郎作品による『ひたすらないのち 愛知演奏会』」（2005年9月18日、愛知県芸術劇場コンサートホール、主催：南山学園）のオープニングを飾る聖歌として披露された¹。カトリック作曲家高田三郎を記念する演奏会でこの曲が演奏されたのは、南山学園主催の演

*略記は S. M. Schwertner, *Theologische Realenzyklopädie. Abkürzungsverzeichnis. 2., überarb. und erw. Aufl.*, Berlin-New York 1994. に従った。

¹ 拙稿「高田三郎と典礼聖歌（1）」『南山神学』30号（2007年）173-191頁、174-175頁参照。

奏会だったからということもあるが、この曲の作曲者とされる山本直忠と高田三郎との接点の故でもある。

まず、両者とも、カトリック作曲家として、1956年に設置された「聖歌集改訂委員会」の委員に任命されていたことが挙げられる。当時の日本のカトリック教会は、全国統一聖歌集として『公教聖歌集』（1933年初版）を改訂しつつ使用していたが、この再改訂版の作成のため、同委員会が設置された。その成果は『カトリック聖歌集』（1966年初版）として実っているが、同委員会の主要なテーマでもあった日本語による創作聖歌について、山本、高田を含む委員の間で数多くの議論があったろうことは想像に難くない²。しかも委員会活動の後半は、折から開催中の第二バチカン公会議の会期（1962-1965年）とも重なった。山本、高田はともに、典礼の国語化の足音を間近に聞きながら、日本語聖歌はいかにあるべきかという大きな問題意識と向き合っていたといえよう。

また、どちらも自作にグレゴリオ聖歌の伝統を生かすことに努めたことが知られている。手法こそ違え、ローマ・カトリック教会に固有の聖歌伝承であるグレゴリオ聖歌の精神を受け継ぐという、作曲カトリシズムとも呼ぶべき姿勢を共有していた。

この両者がアッシジの聖フランシスコに縁のこの祈りに基づく作品を遺していることが、直接両作品の演奏の機会を提供したといえる。本研究のテーマである高田三郎は、後にも述べるように、同じ祈りに基づく口語による典礼聖歌「アッシジの聖フランシスコによる 平和の祈り」（以下「平和の祈り」と略記）を書いている。

² 「聖歌集改訂委員会」ならびに1950年代の状況について、エヴァルト・ヘンゼラー/安足磨由美「『カトリック聖歌集』（1966年）と日本人の作曲による聖歌」『礼拝音楽研究』2号（2002年）57-79頁、安足磨由美「山本直忠、その宗教音楽家としての活動」『エリザベト音楽大学研究紀要』22号（2002年）1-12頁、特に8-11頁のほか、拙稿「インカルチュレーション—日本における典礼聖歌刷新への歩みに寄せて—」『日本カトリック神学会誌』3号（1992年）97-134頁、特に104-106、109-113頁をも参照。

上記の「ひたすらないのち 愛知演奏会」では、山本作品がオープニング曲として、また、高田作品は演奏会を締めくくるアンコール曲として演奏された。「平和のための祈り」の伝作曲家山本直忠と「平和の祈り」の作曲家高田三郎とは、第二バチカン公会議を境にすれば、前者が公会議前の日本のカトリック音楽界を、後者が公会議後の日本のカトリック音楽界を特徴づけた人物といえる。この両者は「聖歌集改訂委員会」に身を置き、当時盛んに議論された日本語聖歌の問題に直面した。その意味で、先の演奏会プログラムを囲むこの「枠構造」は、日本のカトリック音楽の歩みを印象づけることにもなった。

「平和のための祈り」と「平和の祈り」との比較は、日本のカトリック典礼音楽の歩みを語る一つの機会を提供してくれよう。ただしこの小ノートでは、この祈りの原作の成立についての概観 (1)、ならびに、南山大学図書館に寄贈された、高田三郎作品「平和の祈り」の成立過程を覗わせるいくつかの資料を紹介することに焦点を絞りたい (3, 4)。山本直忠作曲と伝えられる「平和のための祈り」をめぐる問題は、本研究ノートのテーマを越えるため、稿を改めて検討することにしたい。ここでは、山本直忠の生涯について安足磨由美の研究に依拠しつつ簡単に触れるにとどめるものとする (2)。

1. 「ミサ中に唱える美しい祈り」

アッシジの聖フランシスコの作として広まっている「平和のための祈り」(伝山本直忠)と「平和の祈り」(高田三郎)の原詩はフランス語である。フランスのカトリック信心会の機関誌『La Clochette』(小鐘)第12号(1912年12月)に初出する。「Belle prière à faire pendant la Messe」(ミサ中に唱える美しい祈り)と題されたこの祈りの作者は不詳だが、『La Clochette』誌の創刊者 Esther Bouquerel 師(1855-1923年)とも推察されている³。

³ 後にアッシジの聖フランシスコ伝「平和のための祈り」として知られるようになるこの祈りの成立史について、以下の文献を参照。F. Schulz, Das sogenannte Franziskusgebet, in: JLH 13 (1968) 39-53; Id., Neue Forschungen über das so genannte Franziskusgebet, in: JLH 41 (2002) 46-53; Ch. Renoux, La prière pour la paix attribuée à saint François: une

以下、Ch. Renoux の研究書に転載されている『La Clochette』誌の 285 頁のフォトコピーからこの祈りの全文を引用しよう。

Belle prière à faire pendant la Messe

Seigneur, faites de moi un instrument de votre paix.

Là où il y a de la haine, que je mette l'amour.

Là où il y a l'offense, que je mette le pardon.

Là où il y a la discorde, que je mette l'union.

Là où il y a l'erreur, que je mette la vérité.

Là où il y a le doute, que je mette la foi.

Là où il y a le désespoir, que je mette l'espérance.

Là où il y a les ténèbres, que je mette votre lumière.

Là où il y a la tristesse, que je mette la joie.

O Maître, que je ne cherche pas tant à être consolé qu'à consoler, à être compris qu'à comprendre, à être aimé qu'à aimer, car c'est en donnant qu'on reçoit, c'est en s'oubliant qu'on trouve, c'est en pardonnant qu'on est pardonné, c'est en mourant qu'on ressuscite à l'éternelle vie.⁴

énigme à résoudre, Paris 2001. なお、カトリック北浦和教会のウェブページには、フランシスコ会士で聖書学者でもあった堀田雄康師（1931-1988 年）による講演録「平和の祈り—その由来と翻訳」（1987 年）が掲載されている。ウェブサイトのアドレスは以下の通り。<http://members3jcom.home.ne.jp/catholic_kitaurawa/seisin/horita1.html> また、この祈りを研究しておられる木村晶子氏（藤女子大学准教授）の論文が藤女子大学『人間生活研究』15 号（2008 年 5 月刊行予定）に掲載される予定である。同氏のご厚意により、論文の元原稿となった講演レジュメ「2006 年度藤女子大学キリスト教文化研究所公開講座：アシジの聖フランシスコ『平和の祈り』の由来」を拝見することができた。ここに記して御礼申し上げたい。

⁴ Renoux, La prière (N.B. 3), 26.

表題からも分かるように、この祈りは元来、ミサ中に聖体への信心を呼び起こす祈りとして作られた。しかし、ほどなくして、この祈りは Stanislas de la Rochethulon et Grente 卿（1941年没）によって、教皇ベネディクト15世（在位1914-1922年）のもとに届けられることになる。Ch. Renouxの研究によれば、同卿は「Souvenir Normand」（ノルマンディの思い出）というノルマンディ出身者を中心に結成された英仏平和友好協会の創設に関わった人物である。彼は、同協会への教皇の協力を求めようと、「Prière du Souvenir Normand au Sacré-Cœur inspirée du testament de Guillaume le Conquérant, Rouen Saint-Gervais, 9 sept. 1087」（征服王ギョーム〔征服王ウィリアム1世、1027-1087年〕が1087年9月9日にルーアンのサン・ジェルヴェにて遺した遺言に基づく、スヴニール・ノルマンの、聖心に捧げる祈り）という、協会の同族意識を覗わせる表題の祈りを送ったが、これが、先の『La Clochette』に掲載された祈り「Belle prière à faire pendant la Messe」だったという⁵。

1914年、サラエボ事件に始まる第一次世界大戦勃発の年に教皇に選出されたベネディクト15世は、戦争のもたらす悲劇に心を痛み、和平外交に心を砕いていた。1915年2月には、自作の「平和の祈り」さえ公表していた。その彼のもとに、1915年12月、この祈りが届けられたのだった⁶。

教皇の胸を打ったこの祈りは、翌1916年1月20日にバチカンの日刊紙「L'Osservatore Romano」に、その8日後にはパリの「La Croix」紙に相次いで掲載され、その後ヨーロッパ中に知られるようになった⁷。

1920年頃フランスのフランシスコ第三会で配布された御絵カードに、「prière pour la paix」（平和のための祈り）との題とともにこの祈りが印刷され、その際、アッシジの聖フランシスコの肖像が背景にあしらわれたため、爾来、この祈りはアッシジの聖フランシスコと結びつけられるようになったという⁸。たと

⁵ Cf. Renoux, La prière, *ibid.* 58-59; F. Schulz, Neue Forschungen (N.B. 3), 48-49.

⁶ Cf. Renoux, La prière, *ibid.* 56-58.

⁷ Cf. *Ibid.* 61-65.

⁸ この経緯について、詳しくは Renoux, La prière, *ibid.* 71-86.を参照。

え聖フランシスコが作者でないにせよ、この祈りは、自然を愛し平和を愛した聖フランシスコ（1181/2-1225年）の精神そのものを歌う祈りとして伝えられていることに変わりない⁹。

2. 伝山本直忠作曲の「平和のための祈り」

この祈りの文語日本語訳「平和のための祈り」に作曲したとされる山本直忠（1904-1965年）は、暁星中学在学中に幸田延、近衛秀麿、山田耕筰に師事、卒業と同時に渡独し、ドレスデン、ライプチヒで研鑽を積んだ。1927年ライプチヒ音楽院を卒業、1928年に帰国後、指揮者、作曲家として活動を始めている。山本が東京高等音楽院（現・国立音楽大学）、自由学園などの教職を経て南山大学の教授職に迎えられたのは、戦後5年を経た1950年のことである。彼は、暁星小学校、同中学校に通うなど、幼少からカトリックの雰囲気と馴染んでおり、さらには、自作聖歌「なべての民よ声あげよ」が前出『公教聖歌集』（1933年）に採用されるなど、カトリックとは縁が深かった。特に1939年の「グレゴリアン音楽学会」発足当時、理事に就任したことがきっかけとなり、以後、宗教音楽の分野での活動に重きを置くようになる。特にピアノ曲「祈聖」（1941年）は、グレゴリオ聖歌の旋律を用いた初の邦人作品として重要である¹⁰。

南山大学に迎えられる年、1950年の1月6日の公現祭に山本は東京の麴町教会（イグナチオ教会）で受洗する。洗礼名はアッシジの聖フランシスコであった。安足は、「平和のための祈り」は、その数年後、彼が南山大学在職中の1955年頃に書いた作品と推測している¹¹。洗礼名がアッシジの聖フランシスコであり、自らフランシスコ会の第三会員であったことも¹²、彼にこの祈りの作曲に向かわせた一因とあってよいかもしれない。爾来「平和のための祈り」は1965

⁹ この祈りの音楽化の例としては、Sebastian Temple（1928-1997年）によるポピュラーな「Prayer of St. Francis - Make me a channel of Your peace」をはじめ数多く知られている。

¹⁰ 安足磨由美「山本直忠」（N.B. 2）1-3頁参照。

¹¹ 同12頁参照。

¹² 同4頁参照。

年に山本が急逝した後も、すでに述べた通り、南山学園に伝承される聖歌として、卒業式や入学式などの式典はじめ、さまざまな機会に演奏されてきている¹³。

3. 高田三郎作曲の「平和の祈り」

山本直忠の「平和のための祈り」の歌詞が文語である一方、高田三郎の「平和の祈り」は、同じ祈りを口語で歌う。まず、彼自身の手になる祈りの詞を引用しよう¹⁴。

神よ あなたの平和のために
わたしのすべてを用いて下さい

憎しみのあるところに愛を
争いのあるところに許しを
分かれているところはひとつに
疑いのあるところに信仰を

誤りのあるところに真理を
絶望のあるところに希望を
悲しみのあるところに喜びを
闇には光をもたらすために

神よ わたしに望ませて下さい

¹³ しかしながら、堀田雄康の講演録（N.B.3）によると、この作品の作曲は山本直忠でない可能性もある。この項の表題を「伝山本直忠」とした理由もここにある。この点についてはいずれ稿を改めて検討することにした。

¹⁴ 高田がこの詞の全文を単独で記す例は未見であるため、漢字の充て方や句読点の有無など本文の確定は難しい。ここでは便宜上、CD「高田三郎の典礼聖歌：東京荒川少年少女合唱隊のうたうこころの歌」（EFCD 3078）のブックレットから引用しておく。

慰められるよりも慰めることを
理解されるよりも理解することを
愛されるよりも愛することを

自分を与えて与えられ
すすんで許して許され
人のために死んでこそ
永遠（とわ）に生きるのだから
アーメン

本作品は、1982年6月13日に東京カテドラル・聖マリア聖堂にて開催された、第13回教会音楽祭「世界平和のために」の委嘱により作曲された¹⁵。作曲にあたり次の準備をなした、と高田は後に述懐している。

歌唱に適当なテキストを得るために私は、昔からある文語訳、小林司教訳、沢田神父訳、英語訳、仏語訳、を手に入れ、それらによって原作に近づく努力をしました。そして、これらすべてを見て「…のあるところに…」の数がそれぞれ異なっていて、六箇条から八箇条といろいろであり、その後の「…られるよりも…ることを」の部分も三箇条から四箇条、「自分を与えて…」から最後の部分も二箇条から四箇条といろいろであることを知り、今回の私の訳文は、作曲上の理由も含めて、八箇条、三箇条、三箇条としました。

そして、歌うに適し、真意を伝えるにふさわしい日本語を、乏しい私の語彙の中から探してこのテキストを決定したのでした。二つの外国語訳の言い回しも大変参考になりましたが、小林司教訳と沢田神父訳からは特に

¹⁵ 高田三郎『典礼聖歌を作曲して』（オリエンズ宗教研究所、1992年）267-272頁参照。同音楽祭の報告は『礼拝と音楽』34号（1982年）70-71頁に掲載されている。

教えられるところが多かったことをここに記して、感謝を表したいと思えます。¹⁶

ここにいう「二つの外国語訳」とは、原作のフランス語版と英語版とを指すが、高田は作曲の時点でも、自著『典礼聖歌を作曲して』執筆の段階においても、フランス語こそが原作であるとは知らなかったようである。しかしながら、この祈りに様々な伝承が存在することは知っており、その幅のある選択肢を前に、自らの責任において祈りの文言を取捨選択し、自身の「平和の祈り」の詞を確定していった。それは「歌うに適し、真意を伝えるにふさわしい日本語」を求めるプロセスでもあった。ここからも、高田の音楽を特徴づける、祈りのことばと向き合う真摯な姿勢を覗うことができよう。

4. 「平和の祈り」関連資料

さて、作曲にあたり高田が検討した「昔からある文語訳、小林司教訳、沢田神父訳、英語訳、仏語訳」の5訳は、幸いにも、高田三郎の夫人高田留奈子氏から南山大学に寄贈された高田三郎の遺品群のなかに、今もそのまま遺っている。

この「平和の祈り」関連の資料は、文化庁から高田宛に送られたらしい角形3号封筒のなかにまとめて収められている。封筒の表には「郵便番号 100 / 東京都千代田区霞が関 3-2-2 / 文化庁 / 電話 東京 (581) 4211 (大代表)」と印刷されており、「文化庁」と「電話…」の行間には「文化庁芸術課」のスタンプが押されている。封筒の左上には「霞が関郵便局 / 料金後納郵便」のスタンプもみえる。住所の右脇に高田の手により鉛筆書きで「平和の祈り」と記されており、裏面にも高田の手で2行にわたり鉛筆書きで「平和の祈り / 行けモーゼ」と記されている。裏面に青マジックで「重要 / 名古屋へ」とあるのは、本資料の寄贈者である留奈子夫人の手によるものであろう。

¹⁶ 高田三郎『典礼聖歌を作曲して』、同上書、267頁。

封筒のなかには全 41 葉の印刷物が入っている。中には複数葉が二つ折りにしてまとめられたものもあるため、便宜上、それらまとまりごとに 1 組と数えることにする。これで全 13 組になる。

以下は、そのリストである。全収容物を封筒から取り出し、上から順番に資料番号を振っていったが、これらはいくまでも便宜上の番号に過ぎないことを断っておく。また、資料⑬は、二つ折り資料がいくつもまとめられているため、さらに A～E の 5 種に細分しておくことにしたい。

- ① 「混声四部版手稿譜の 30 小節目以降のコピー (2 頁目)」 251×357mm
サイズ 3 葉
(計 3 葉)

- ② 「同声二部版手稿譜のコピー」 B5 判 2 葉
「同声二部版手稿譜のコピー」 251×357 mm サイズ 1 葉
(計 3 葉)

- ③ 「混声四部版手稿譜のコピー」 B4 判 1 葉
(計 1 葉)

- ④ 「同声二部版手稿譜のコピー」 251×357 mm サイズ 1 葉
「混声四部版手稿譜のコピー (1 頁目)」 251×357 mm サイズ 1 葉
「混声四部版手稿譜の 30 小節目以降のコピー (2 頁目)」 251×357mm
サイズ 1 葉
(計 3 葉)

- ⑤ 「同声二部版手稿譜のコピー」 B5 判 1 葉
「混声四部版手稿譜のコピー (1 頁目)」 251×357 mm サイズ 1 葉

「混声四部版手稿譜の30小節目以降のコピー(2頁目)」251×357mm
サイズ1葉
(計3葉)

⑥「詩のこころ / II. 歌ミサと典礼聖歌…高田三郎」(演奏会プログラム?)のコピーB5判1葉
(計1葉)

⑦「TROIS PRIÈRES ATTRIBUÉES A SAINT FRANÇOIS」(Saint Francois d'Assise: Documents, écrits et premières biographies, ed. Théophile Desbonnets and Damien Vorreux, Paris 1968, 176-177. 筆者は未見)のコピーB5判1葉
(計1葉)

⑧「教皇の意向に応じて、世界のために祈りましょう。」(祈りの葉?)
のコピー133×130 mm サイズ1葉
(計1葉)

⑨「御絵(東京 聖クララ会③)」ならびに「マルコム・マゲッリッジ著 / 沢田和夫訳『マザーテレサ:すばらしいことを神さまのために』(女子パウロ会, 1976年) 180-181頁」のコピーA4判1葉
(計1葉)

⑩「A Simple Prayer」(御絵 [Printed in Italy]) 22×140 mm サイズ1葉
(計1葉)

- ⑪ 「聖母の騎士会創立者 / 福者マキシミアノ・M・コルベ / コンベンツアル聖フランシスコ修道会司祭 / (1894-1941)」 (御絵) 65×114 mm サイズ1葉
(計1葉)
- ⑫ 「混声四部版手稿譜のコピー (1頁+2頁)」 251×357 mm サイズ4葉
(計4葉)
- ⑬A… 「同声二部版手稿譜のコピー」 251×357 mm サイズ1葉
「混声四部版手稿譜の29小節目までのコピー (1頁目)」 251×357 mm サイズ1葉
「混声四部版手稿譜の30小節目以降のコピー (2頁目)」 251×357 mm サイズ1葉
(計3葉)
- B… 『『行けモーセ』の筆写譜のコピー』 251×357 mm サイズ2葉¹⁷
(計2葉)
- C… 『『兄弟のように』の印刷譜校正刷りのコピー』 251×357 mm サイズ1葉¹⁸
『『詩編133』の印刷譜校正刷り (答唱ー詩編ーオブリガート部 [1頁目]) のコピー』 (兄弟のように) 251×357 mm サイズ2葉
『『詩編133』の印刷譜校正刷り (答唱部 [2頁目]) のコピー』 (兄弟のように) 251×357 mm サイズ2葉
(計5葉)

¹⁷ 筆跡は高田本人のものではない。

¹⁸ 一部、高田自身による鉛筆書きあり。

D…「混声四部版手稿譜の 29 小節目までのコピー (1 頁目)」251×357
mm サイズ 1 葉

「混声四部版手稿譜の 30 小節目以降のコピー (2 頁目)」251×357
mm サイズ 1 葉
(計 2 葉)

E…「同声二部版手稿譜のコピー」B5 判 2 葉

「混声四部版「アッシジの聖フランシスコによる“平和の祈り”」
印刷譜の 27 小節目まで (1 頁目) のコピー」B4 判 2 葉
「混声四部版「アッシジの聖フランシスコによる“平和の祈り”」
印刷譜の 28 小節目以降 (2 頁目) のコピー」B4 判 2 葉
(計 6 葉)

前述の「昔からある文語訳、小林司教訳、沢田神父訳、英語訳、仏語訳」の 5 訳のうち、「昔からある文語訳」は本研究ノートにおける資料⑩にあたる。同様に、「小林司教訳」は⑧を、「沢田神父訳」は⑨を、「英語訳」は⑩を指し、残る「仏語訳」も同じく⑦と同定してよいだろう。

ここでは、高田自身の書き込みのある、⑦「仏語訳」、⑧「小林司教訳」、⑨「沢田神父訳」について検討しよう。

資料⑦は「PRIÈRE POUR LA PAIX」の表題のもとに「平和のための祈り」が 18 行にわたって掲載されている。上掲の「Belle prière à faire pendant la Messe」と比較すると、文言に若干の相違がみられるものの、祈りの構成要素などに大きな違いはないことが分かる。以下は資料⑦におけるこの祈りの全文である。

Seigneur,

faites de moi un instrument de votre paix.

Là où est la haine, que je mette l'amour.
 Là où est l'offense, que je mette le pardon.
 Là où est la discorde, que je mette l'union.
 Là où est l'erreur, que je mette la vérité.
 Là où est le doute, que je mette la Foi.
 Là où est le désespoir, que je mette l'espérance.
 Là où sont les ténèbres, que je mette votre lumière.
 Là où est la tristesse, que je mette la joie.
 O Seigneur, que je ne cherche pas tant
 d'être consolé que de consoler,
 d'être compris que de comprendre,
 d'être aimé que d'aimer.
 Car c'est en se donnant que l'on reçoit,
 c'est en s'oubliant soi-même que l'on se trouve soi-même,
 c'est en pardonnant que l'on obtient le pardon,
 c'est en mourant que l'on ressuscite à l'éternelle vie.

この資料には「…のあるところに…を」の部分に1～8の番号が振ってある。注目すべきは4と5との入れ替えの指示があることである。「Là où est l'erreur, que je mette la vérité. → Là où est le doute, que je mette la Foi.」ではなく、「Là où est le doute, que je mette la Foi. → Là où est l'erreur, que je mette la vérité.」の順番とすることが選択されているのである。同様に、7と8も入れ替えの指示がなされている。すなわち、「Là où est la tristesse, que je mette la joie. → Là où sont les ténèbres, que je mette votre lumière.」が選択されている。さらに、「Car」に続く「自分を与えて…」以下の部分でも、4箇所の「c'est」に下線を施したうえで、「c'est en s'oubliant soi-même que l'on se trouve soi-même」の行頭に「×」印が施されている。つまり、上掲の高田作品の「平和の祈り」の構成に合致する指示内容となっている。

次に⑧「小林司教諭」をみてみよう。ここにいう「小林司教」とは、1954-1976年に仙台教区長の任にあった小林有方のことであろう。この資料は祈りのための葉と思われるが、欄外上には手書きのボールペン字で「小林有方司教諭」と記されており、さらに鉛筆書きで「(仙台)」と書き加えられ、「有方」の二文字が二重線で削除されている。

「小林司教諭と沢田神父諭からは特に教えられるところが多かった」との高田の言葉通り、この資料⑧への書き込みが一番多い。以下にまず、「小林司教諭」の全文を記そう。

平和の祈り

(アシジの聖フランシスコによる)

神よ、わたしを、
 あなたの平和を宥らせるために、用いてください。
 わたしが、憎しみのあるところに、愛をもたらすことができるように、
 また、争いのあるところに、和解を、
 分裂のあるところに、一致を、
 疑いのあるところに、真実を、
 絶望のあるところに、希望を、
 悲しみのあるところに、よろこびを、
 暗闇のあるところに、光をもたらすことができるように、
 助け、導いてください。

神よ、わたしに、
 慰められることよりも、慰めることを、
 理解されることよりも、理解することを、
 愛することよりも、愛することを望ませてください。
 わたしたちは、

自分を与えることによって、与えられ、
 すすんでゆるすことによって、ゆるされ、
 人のために死ぬことによって、永遠に生きることができるからです。

この祈りの文を、高田は次のように修正している。

まず、2行目の「あなたの平和を实らせるために」の「を实らせる」を二重線で削除し「の」を加えたうえで、これを1行目の「神よ」と「わたしを」との間に入れている。

3行目では、「わたしが」と「もたらすことができよう」とが削除され、4行目の「また」も削除され、「和解」に下線を施したうえで横に「(ゆるし)」を書き加えている。6行目の「疑いのあるところに」と「真実を」の間に「信仰を、誤りのあるところに、」を挿入、さらに「真実」の「実」を「理」に修正している。なお、3～6行目の行頭にはそれぞれ1～4の番号をも付している。

9行目の「暗闇のあるところに」では、「暗」と「のあるところ」を削除したうえで「は、」を書き加え、「闇のあるところには」に修正している。また、「光をもたらすことができるように」の「ことができるよう」を削除、代わりに「ため」を書き加え、「光をもたらすために」とした。10行目の「助け、導いてください」は全削除である。

後半においては、14行目の「望ませてください」を移動させ、11行目の「神よ、わたしに、」の直後に置き、以下12～14行目の「…れることよりも…」の「こと」を消して、それぞれ「…れるよりも…」に直している。15行目の「わたしたちは、」も削除している。

16行目では「自分を与えることによって」の「ることによっ」を削除し「自分を与えて」とし、同じく「すすんでゆるすことによって」(17行目)「人のために死ぬことによって」(18行目)も、それぞれ「すすんでゆるして」と「人のために死んでこそ」に変えている。18行目の最後の「永遠に生きることができるからです」は、「永遠に」にルビを振って「とわに」と読み、「ことができる」と「です」を削除、代わりに「…生きる」の後に「のだ」と加えて「永遠

(とわ)に生きるのだから」と書き換えている。さらに、最後に「アーメン」と書き足して祈りを締めくくっている。

こうした大幅な修正の結果、3 箇所を除けば、上掲の高田自身の「平和の祈り」と同じ祈りに仕上がっている。その3 箇所とは、高田の「平和の祈り」の2 行目「わたしのすべてを用いて下さい」の「…のすべて…」、ならびに、5 行目「分かれているところはひとつに」の「分かれている」と「ひとつに」である。

資料⑨の「沢田神父訳」はどうなっているだろうか。

主よ、あなたの平和を人びともたらす道具として、わたしをお使いください。

憎しみのあるところには愛を、

不当な扱いのあるところにはゆるしを、

分裂のあるところには一致を、

疑惑のあるところには信仰を、

誤っているところには真理を、

絶望のあるところには希望を、

くらやみには光を、

悲しみのあるところには喜びをもっていくことができますように。

慰められることを求めるよりは慰めることを、

理解されることよりは理解することを、

愛されることよりは愛することを、

求める心をお与えください。

わたしたちは自分に死ぬことによって自分を見だし、自分自身に死ぬことによって永遠の命をいただくのですから。 アーメン

この資料では、高田は、「…のあるところに…を」の8 箇条のうち、「憎しみのあるところには愛を」「不当な扱いのあるところにはゆるしを」「疑惑のある

ところには信仰を」「絶望のあるところには希望を」「くらやみには光を」「悲しみのあるところには喜びを」の6箇条に「○」印を付している。これは、資料⑩の「英語訳」が収める全6箇条と合致する。ここから高田が「沢田訳」と「英語訳」を比較していたことが分かる。さらに高田は、「沢田訳」の「…られるよりも…ることを」の部分の全3箇条の上方に縦線を記している。第三部の「自分を与えて…」から最後の部分では、「自分に」という文言と「自分自身に」という文言の右に「○」を記し、「…自分を見だし、」と「自分自身に死ぬことによって…」の間に「ゆるす」という文言を挿入している。これは、他のすべての版が収める「ゆるし」の箇条を自身の版にも入れるという意味の表れであったかもしれない。

このように、資料⑦「仏語訳」、⑧「小林司教訳」、⑨「沢田神父訳」には、多くの書き込みがみられる一方、⑩「昔からある文語訳」では、わずかに「争いのあるところに…」の上部に縦線を施し、「闇のあるところに光をもたらしたまえ」の部分の「…もたらし」と「たまえ」との間に「め」を挿入して「もたらしたまえ」に修正するに留まっている。⑩「英語訳」には何の書き込みもない。全体から受ける印象では、やはり、一番書き込みの多い⑧「小林司教訳」を中心に、⑦「仏語訳」と⑨「沢田神父訳」とを参考にしながら祈りの詞の選定作業にあたったと思われる。これは、高田本人が書いていることにも合致する。しかしながら、前述の「英語訳」を参照した例や、「闇には光をもたらすために」の部分では「暗闇」（小林訳）や「くらやみ」（沢田訳）を採らず、文語訳にもある「闇」を選択するなどの例もあり、書き込みの少ない版だからといって参照していないとは一概には言えない。

おわりに

以上、南山大学に寄贈された高田三郎の遺品から、「平和の祈り」関連の資料を紹介した。本ノートは、高田の自著における音楽づくりについての記述を彼の遺品によって裏付けようとする初の試みとなるかもしれない。これらの資料は、聖歌の詞となるべくことばを、熟慮に熟慮を重ねながら慎重に選びとって

いった高田の作曲姿勢を静かに、しかし雄弁に物語っている。「平和の祈り」に限ってみても、高田は、先達たちの伝承を敬愛の念をもって吟味したうえで、必要と判断した場合には大胆な修正や加筆を施している。特に「わたしのすべてを用いて下さい」と「分かれているところはひとつに」は、彼が参照したどの邦語訳にもみられない、彼独自の表現である。前者は、この祈りを歌う者の全身全霊をもつての献身を表現するにふさわしく、後者もまた、平易で具体的なことばが歌う者の祈りの心をいっそう鼓舞することに成功していないだろうか。

今後は、高田が参照した「昔からある文語訳、小林司教訳、沢田神父訳、英語訳、仏語訳」のそれぞれのルーツをさらに辿ることにより、この祈りの伝承過程を一層明らかにするとともに、伝山本直忠作曲の「平和のための祈り」とも比較し、その伝承関係を探ってゆくことにも目を向けたい。

付記:本稿は、「2007年度南山大学パツヘ研究奨励金 I-A-2(Nanzan University Pache Research Subsidy I-A-2 for the 2007 academic year)」による研究成果である。